

No. 46

NEWSLETTER

国際音楽資料情報協会日本支部

February 28 2013

ISSN 1347-7277

【特集】

IAML モントリオール国際大会報告

2012 年 7 月 22 日～ 27 日

IAML モントリオール国際大会に参加して

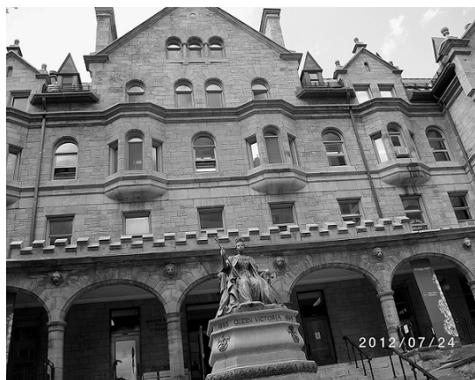
荒川恒子

図書館は世界中にあります。ということは、多少大袈裟な言い方にはなりますが、IAML 国際会議に参加することを通して、世界旅行をすることができます。今回は生まれて初めて、日本から東に向かい、シカゴ経由でカナダはケベック州モントリオールに向かいました。アメリカを経由する際の手続きの煩雑さ、厳格さから、まさに現在この国が抱えている問題を実感することになりました。モントリオール空港から、バスと地下鉄を乗り継いで、ホテル最寄りの駅に着くのは簡単でした。しかし地下鉄の改札を出て驚いたのは、立派な地下街が広がっていて、出口がすぐには見つからないことでした。モントリオール市中央部のショッピング街の多くは、地下にあるのです。まさに厳冬となるこの国ならではのアイデアです。さらに驚いたことには、メンバーの多くが宿泊したホテルの番地が rue Peel 3407 番なのです。あまりに大きい番号に、その意味を図りかねました。建物ごとに番号が 4 つほど離れ、おまけにブロックごとに 1000 番位がまとめられ、間は大きな飛び番号になっていました。事実、ホテルは標高 232m の小高い丘の上にあるモン・ロワイヤル公園のふもと、開催校マ

ギル大学まで徒歩で数分という便利な所がありました。

さてほとんどの参加者が現役図書館員で、発表内容は彼らの毎日の仕事に役立つ、カタログの作成、検索方法等に関わるものが多いです。カナダでの開催ということもあり、今回はカナダやアメリカの図書館員の研修の場となった感がありました。ところで最近の大会発表要旨は、ホームページからダウンロードできます。こんなに時間をかけ、かなりの費用を負担して会議に出席する必要はどこにあるのでしょうか。でもリピーターが多いのは、他の学会にはない素晴らしい面があるからです。ここで会議の全体像をお示しておきましょう。

① 最初と最後には、カウンセル・ミーティングと総会、② 間に挟まって発表、展示会、ポス



マギル大学

ター・セッションといった、図書館や音楽研究を取り巻く問題や現状を知る機会、③ 音楽付きオープニングと開催地ならではの趣向を盛り込んだフェアウェル・パーティ、④ 最低 2 本の夜のコンサートと、その他の飛び入りコンサート、⑤ 公共図書館見学、⑥ 半日の遠足、がいずれの大会にも組み入れられるものです。

私にとって興味のある部分は、②③④⑤⑥なのですが、今回はまず①の中で重要なことに関して、御報告しておきましょう。昨年 6 月に本部事務局長のピア・シェクターさんが、個人的に日本を訪問され、日本支部の総会に出席なさるとともに、例会で「IAML の将来」について、お話しくださったことは、皆様の記憶にも新しいことでしょう。ここ 5 年間位の間に IAML のメンバーは減少しました。日本でも同様の傾向がみられます。そのような中で健闘して会員数を増やしているのはフランス、ドイツ、スウェーデン位です。また図書館に音楽専門の図書館員を配置できなくなっているのも、世界的現象です。せめて学習の機会として、国際大会への出席を期待したいところですが、初めて出席する者にとっては、協会の組織が複雑で、あまりにもわかりにくかったという自らの経験を語る方が多くおられます。国際会議に参加する時間、費用の捻出が難しい現実、外国語を自由に使えない等、心配もあります。



モン・ロワイヤル公園

ウェブやブログ、ツイッター等を活用し、誰でも自国語で発言できるようにしよう、会議への参加、不参加に拘わらず、世界中の IAML メンバーを結びつけるための様々な工夫をしよう、と試行錯誤がされています。特に今まで関心がヨーロッパ、北米に偏っていたことを問題視し、アジアやアフリカ、南半球にも目を向けるべきとの意識が高まっています。

シェクターさんが、日本において提案され意見を求めた問題に、使用言語に関する点がありました。今年の会議では、カナダという多言語国での開催ということもあるのかもしれませんが、この点に特に気を遣っている感じがしました。公用語を英語のみにするという「IAML の将来」戦略会議の意見に対して、最終的には正反対な反応がなされました。会議中も以前なら堪能な英語で発表した人が、特に許可されているからと断って、ドイツ語で話されました。また早口の英語でまくしたてる方には、注意を喚起してゆっくりと鮮明にしゃべることを促しておられました。ウェブ上の記事に関しても、重要な問題は、グーグル翻訳機等を用いて、様々な言語で報告したいとの申し出がありました。それがこんなに早く、実現するとは私は考えていませんでした。でも人間のメンタリティーの解説はとても難しく、ほとんど理解できない文章が掲載されています。本部のホームページ上で、重要な案件に関してクリックなされると日本語になりますので、お読みになってみてください。このような手段が有効に活用されるには、もう少し時間がかかることでしょう。しかしロボット等の急速な人間化を眼前にすると、否定的な意見ばかりでなく、用いながら改良していく姿勢が大切なのかもしれません。

さて 2013 年は会長、副会長の改選の年にあたります。この時から電子選挙にするべく、準備が始まりました。メンバーは各支部の会

計に、メール・アドレスを届け出、それを本部の会計が掌握する必要があります。さらにそれだけでなく、各人はみずからホームページから登録し、ログ・インして初めて、選挙に必要なピン・ナンバーが見つかり、選挙ができるというシステムになっています。大会中にも模擬で練習を行いました。システム自体はいとも簡単なのですが、全 1800 名程度のメンバーの内、未登録者が 600 名弱もおられるとのこと。紙媒体を通して催促されるというより、メンバー各自の自覚が求められることとなります。なお会長にノミネートされたのは、RILM 委員長のバーバラ・マッケンジーさん一人です。選挙はほんの形だけで、すでに次期会長は決まっています。副会長は 5 名のノミネートですから、選挙結果を待って、7 月末に開催されるヴィーン会議の時に、結果が発表されるはず。ということは、この 4、5 月頃はウェブ上の IAML のホームページに目をお通しください、選挙に参加することから、メンバーとしての国際的活動を開始なさっては如何でしょうか。

長らくの懸案である *Fontes* の電子化が、秒読みの状況に入ってきました。J store との契約が完了したというニュースが、昨年暮の会長フルーリ氏の御挨拶にも見られます。将来のことを考えると、認めざるを得ない決定かと感じます。*Fontes* を入手することを主たる目的として、メンバーになっている者が多い日本支部では、今後の対処が注目されます。このようなことは全て、情報伝達の手段が急速に電子化に移行していることと関わるはず。今回の発表や展示参加者の内容も、そのことを反映しているようです。書籍や楽譜のカタログ作成と、ネット上の公開は当然のことになりました。今回はサウンド・アーカイヴの構築と検索、将来を見据えたそれらの国際基準の制定に関わる発表が目立ちました。また複数の図書館



フェアウエル・パーティ会場 <Sacerie de Montagne>

の参加によるプロジェクト、例えば Library of Congress、British Library、Harvard University、Julliard School、Morgan Library and Museum、New York Public Library の協力による手稿譜や原典資料となる印刷譜のデジタル化とオン・ライン・アクセスの状況説明 (The Music Treasures Consortium Project)、RISM からは「カリスト」を用いて、各自でデータを登録できる方法のデモンストレーション、RILM も EBSCO との提携および、自らが要旨を書き込み訂正する時代となったことが知らされました。それらに対応して、サービスができる図書館員の教育が求められます。国境を越えて図書館員の交換研修が活発になっているようです。

さて開催校マギル大学からの発表に関して、少し御案内いたしましょう。ここにはバーニー研究所があります。作曲家、音楽史家チャールズ・バーニー (1726-1814) の娘で文筆家、フランチェス Frances (1752-1840) の著作を収集し、チャールズとやり取りされた手紙等を通して、チャールズ研究に新たな光を投げ、それを出版するというオーソドックスな発表、かたや藤永一郎氏 (マギル大学) の協力により、技術と音楽分析を結合させる方法の試行等、先端技術を駆使した興味深い発表が、若い学生達からなされました。なお今回の発表

中には Peachnote、IMSLP、SIMSSA、MEI、RDA、AACR、AFNOR、ISBD 等、私には聞きなれない省略文字が飛び交う内容が沢山ありました。しかしウェブ上で調べてみると、専門家の間では一般的な言葉であることが分ります。新しい情報手段や工夫が続々と生まれているのです。私自身にとって重宝なのは Petrucci Music Library の存在を知ったことです。これは International Music Score Library Project (IMSLP) の仕事で、カナダの著作権に基づいてなされています。目下 221,000 冊の楽譜がデジタル化してネット上に収録されています。なおマギル大学という技術に強い大学が開催校である、ということもあるのかもしれませんが、Skype を用いてダブリンから発表なさった方もおられました。さらに発表の際用いる機器に、トラブル発生が多いのは一般的なことです。しかし本大会では、ものの見事に処理なさる技術者がおられ、全ては実に円滑に運営されていました。

しかしいくら電子化が進み、能率が上がっても、本協会の主題と目的は「音楽とそれに関わる」きわめて人間的な活動の研究と、それを支える図書館やアーカイヴ等の情報交換であることに変わりません。このような会議に出席する意味は、まさに Face to Face の語り合いと打ち合わせ、様々な国の人々の文化や生活を知ることが大きいはずです。今回もカナダの現代作曲家の作品を鑑賞したり、カナダのパーティーの仕方を体験したり、なんにでもメープル・シロップをスパイスのように入れるカナダ食を楽しみました。また私は遠足として、「多民族の歴史、その食文化の紹介」に参加しました。中国人、フランス人、ポルトガル人、イタリア人、ユダヤ人街を見物し、かれらの移住の背景や、今の生活振りを教えられました。参加者には旅行好きな方が多いのです。シェクターさんは御多忙にも拘わらず、早

めに到着なさりケベック・シティの見学もされた由。電子化が進み、会議に行かなくても知識は得ることができます。しかしそのような時代だからこそ、様々な国の日頃の営みに触れることが重要なのではないのでしょうか。この会議は、図書館員の日常の仕事と密接に関わる問題提起が大部分です。現役の図書館員が出席できる土壌が、日本にできるような働きかけこそ、IAML 日本支部の仕事のひとつではないか、と出席するたびに想いを新たにしています。

またシェクターさんが強調しておられたように、IAML 本部と支部の関係は、支部が本部の意向を反映した活動をするのではなく、本部を「母」としながら、各支部はその国に特有な問題に取り組むことにあります。わが国の図書館やアーカイヴを取り巻く問題を改善していくために、支部のメンバーが語らいを重ねるとともに、日本の現役図書館員からのフランクな発信が待たれます。

(日本支部副支部長)



モントリオール街角

IAML 国際大会で発表して

久保田慶一

2012年7月22日から27日まで、カナダのモントリオールのモン・ロワイヤル・センターで IAML の国際大会が開催された。筆者は7月26日、「音楽資料—ネットワーク、利用者、リサーチ Music resources — network, users, research」のセクション（午後2時から3時半まで）で発表した。題目は「2009年と2011年における『日本の音楽資料』調査委員会の活動」でした。このセクションではもうひとつ発表がありました。それはクリスティーナ・リンクラター氏（ハーヴァード大学）の「特別コレクションの利用と利用者—21世紀の音楽研究のエスノグラフィに向けて」です。司会はジム・カッサーロ（プッツバーク大学）でした。

IAML日本支部の会員の方はご存じかと思いますが、日本音楽学会の「日本の音楽資料」調査委員会は、IAML日本支部と音楽図書館協議会との連携により、2009年、2011年、2012年の3カ年にわたって、文化庁委託業務を行っております。業務の名称はそのつど変更されておりますが、主たる目的は、散逸・劣化の危機にさらされています日本にある音楽資料の調査です。初年度は、①日本人作曲家の手稿譜、②1945年以前に我が国で出版された楽譜、③西洋音楽の手稿譜、④1900年以前に外国で出版された楽譜について、日本の国公立図書館と私立音楽大学の図書館の所蔵状況を調査しました。そして2011年度はこのうち、②1945年以前に我が国で出版された楽譜について、データベース化のための資料調査を中心に行いました。そして2012年度は、国会図書館の協力を得て、当該図書館でのデータベース利用を目的

に、データファイルの整備を行っております。今回の発表では、2009年と2011年の調査について報告し、将来の展望として、今年度の調査による成果公開について述べることにしました。

発表の骨子は次のようにしました。

1. 日本における西洋音楽小史
2. 調査対象としての「日本の音楽資料」
3. 「日本の音楽資料」調査委員会
 - (1) 委員会設立までの経緯
 - (2) 委員会の組織
4. 2009年度の活動
5. 2011年度の活動
6. 2012年度の活動

発表では最初に明治時代初期にはじまる我が国の西洋音楽の導入の歴史を簡単に紹介しました。こうした歴史的背景に関する知識がないと、調査対象として「日本の音楽資料」を4種類に区分した理由を理解してもらえないだろうと考えたからです。もっともこのような事前学習があったことで、よく理解できたかどうかは、確認しておりません。

委員会設立までの経緯も、調査委員会の活動を理解するうえで、ぜひ説明しておかなくてはならない内容と思いました。文化庁から3カ年にわたる業務を委託されるまでには、およそ10年に及ぶ活動やそれに携われた人々のご努力がありました。主なものを挙げてみたいと思います。

○2002年：音楽図書館協議会（専門・公共図書館部会）による「音楽コレクション」の調査と『日本の音楽コレクション』の発行。

○2005年：日本音楽学会第56回全国大会において、シンポジウム「日本の音楽資料—収集・整理と研究」を開催。

○2005・6年度：文化庁によるニッセイ基礎研究所への委託業務「音楽情報・資料の保存及び活用に関する調査研究」の実施。

○平成2007：IAML 日本支部、日本音楽学会（関東支部）、音楽図書館協議会共催によるシンポジウム「日本の音楽資料・情報を考える」を開催。

○2008年：日本音楽学会は「日本の音楽資料」調査委員会の設立を決定。

○2009年：日本音楽学会は IAML 日本支部、音楽図書館協議会と連携して、「日本の音楽資料」調査委員会を発足。文化庁委託業務の実施（初年度）

2009年度の調査では、全国 475 機関に対して、アンケート調査を実施し、4種類の「日本の音楽資料」の所蔵状況を確認しました。しかし多くの課題を認識することにもなりました。国公立図書館からの回答の内容については、その精度の差が著しく、調査内容の精査が急務となったのです。今後、データベース化をめざすのであれば、継続的な調査が必要であることを痛感させられたわけです。さらに著作権処理がなされていない邦人作曲家の自筆譜については、データの公開にまで至ることはほとんど不可能であることも判明しました。

こうした背景から、2011年度の調査では、データベース化にむけての調査対象を、



発表会場にて（荒川恒子氏撮影）

「1945年以前に我が国で出版された楽譜」に限定することになりました。その結果、この調査において調査対象となった機関は149機関で、12,657点、書誌件数は8,044件となりました。

2012年度の調査は、昨年度の調査が十分にできなかった、数多くの資料が所蔵されていると思われる東京芸術大学と東京学芸大学の附属図書館、ならびに国会図書館の関連資料を追加調査しました。現在、データの精査ならびに集計中ではありますが、3月末に発行します報告書で、お知らせすることができると思います。

モントリオールでの発表ではこの他に、5線譜以外に文字譜、演奏譜などの珍しい楽譜のコピーを資料として提示し、多くの方に関心をもっていただけたと思います。拙い英語での発表でしたが、ふたつほど質問がありました。ひとつは、所蔵館のリストに挙げてあった「Music Memorial Hall」がどのようなものであるかということでした。これは訳が適切でなかったためなのでしょう。各地域の出身の作曲家や作詞家を記念したホールのこと、具体的には、「浜辺の歌音楽館」（成田為三）、伊澤修二文庫、貴志康一記念室、瀧廉太郎記念館、中山晋平記念館などです。ふたつめは、1945年以前に我が国で出版された楽譜は著作権問題が発生しないと私が発言したことに対してかと思いますが、日本の著作権処理に関する質問でした。今から言えば、日本の場合、著作権は50年で消滅しますが、アメリカなどでは70年ですので、1945年の発行の楽譜については、まだ著作権が存在しています。発表の場では質問者の意図が理解できず、十分な回答ができませんでした。幸いにフロアーのおられた金澤正剛先生に助け

船を出していただきました。

さて、文化庁委託業務による「日本の音楽資料」の調査は、2013年度中に、国会図書館のHPから何らかの方法でデータが公開されるようになれば、ひとまずその任を終えたことになります。IAML 日本支部から参加している調査委員の方々には大変にお世話になりました。これらの方々の献身的な努力がなければ、こうした大事業を継続的に行うことはできなかったでしょう。日本音楽学会や音楽図書館協議会にとっても、記念碑的な事業になったのではないのでしょうか。

IAML 日本支部、日本音楽学会、音楽図書館協議会の3機関による「日本の音楽資料」調査委員会は、ひとまずその役目を終えたわけですが、今後も、日本音楽学会の下部組織として、存続させ、文化庁や国会図書館との連携が図れるようにしたいと思っております。

(日本音楽学会「日本の音楽資料」調査委員長)

2013年ウィーン国際会議



7月28日～8月2日
www.iamlvienna2013.info

* お問合せ、お申込は上記ウェブ・サイトへ

【追悼】

Mary Wallace Davidson

金澤正剛

アメリカのライブラリアンで国際的な活躍で知られるメリー・ウォレス・ダヴィドソン Mary Wallace Davidson 女史が、2012年10月11日に死去された。4年間にわたる闘病生活の末ということで、心から哀悼の念を表したい。女史の活躍はボストン郊外のブルックライン公立図書館に始まり、ラッドクリフ大学、ウェルズレー大学の図書館に勤めた後、イーストマン音楽院に移って、同音楽院のシブリー音楽図書館の設立に手腕



を揮い、その功績によって MLA から表彰されている。著作や論文も多いが、特にジェームズ J. フェルドと共著のアメリカ音楽の手稿目録(1980年)は重要な文献として知られる。MLA の会長(1983-85年)や IAML のアメリカ支部長(2005-2008年)を務めた他、AMS や SAM などでも活発に活動が続けていた。筆者もボストン時代以来親しく交友し、何年か前に親友でアメリカ国会図書館のジェラルディン・オストローヴさんと訪日された時には、観光案内を務めた懐かしい思い出もある。2012年7月に IAML の大会がモントリオールで催された時に参加されたのが最後の公的な活動であつたらしいが、その時に案外とお元氣な姿を拝見しただけに、残念さもおである。なお2013年4月13日(土)午後14時から、ボストン郊外のケンブリッジ・フレンズ・ミーティング・ハウス(Friends Meeting at Cambridge, 5 Longfellow Park, Cambridge, MA)で、追悼礼拝が予定されている。

(写真は昨年のもントリオール大会にて)



事務局だより



メールアドレス確認のためのお願い

前号ニュースならびに本号の荒川副支部長の大会報告でもお知らせしておりますが、IAML本部の役員選挙は今回より電子投票で実施されることになりました。各支部は会員のメールアドレスを確認し、本部事務局宛通知することが要請されております。支部事務局では、名簿の編集も兼ねて確認作業をおこなうこととし、調査票を同封致します。ご回答をお願い致します。なお、支部会員名簿は個人情報保護のため公開致しません。

2013 年 IAML ウィーン会議の開催

今年の IAML 国際会議は 2013 年 7 月 28 日から 8 月 2 日まで、オーストリアのウィーンで開かれる。開会式はシティーホール、メイン会場はウィーン大学キャンパス、フェアウェル・ディナーはパレ・フェステルで催される。大会の内容は音楽の都にふさわしく、ウィーンゆかりの作曲家にちなんだプログラムが多数用意されている。お申し込みは下記サイトで。 <http://www.iamlvienna2013.info>

多くの方々の参加をお待ちしています。なお、日本支部では次世代養成の一環として、IAML 国際会議参加助成制度を設けています。1 年以上在籍の若手会員で、初めて参加される方が対象です。応募書類受理後、審査を経て参加補助金が交付されます。応募要領は事務局・長谷川までお問合せください。

hasegawa@lib.kunitachi.ac.jp

電話 042-536-0799 (国立音楽大学附属図書館)

フランス国立図書館のオンライン目録

フランス国立図書館の音楽部門は古いードカタログの情報をすべてオンライン目録に組み込んだ (<http://www.catalogue.bnf.fr>)。またパリ・コンセルヴァトワールの目録 (F-Pn) も現在は 75 パーセントがウェブ・オパックで検索できる。2016 年にはすべての目録がオンライン化される予定である。

<http://www.mediatheque.cnsmdp.fr/>

民音音楽博物館の展示

民音音楽博物館では本年 1 月 1 日から 4 月 14 日まで、「日本の唱歌を訪ねて」展を開催している。入場無料。詳細はホームページ参照 <http://www.museum.min-on.or.jp/>

本年度支部総会

本年度の支部総会は、6 月上旬の日曜日午後を予定しています。例年のように研究例会も同日開催致します。詳細は確定次第、追ってお知らせ致します。

《目次》

IAML モントリオール国際大会に参加して	荒川恒子 p.1
IAML 国際大会で発表して	久保田慶一 p.5
【追悼】 Mary Wallace Davidson	金澤正剛 p.7

Newsletter — 国際音楽資料情報協会日本支部
第 46 号

2013 年 2 月 25 日発行

国際音楽資料情報協会 (IAML) 日本支部
〒171-8540 東京都豊島区南池袋 3-4-5
東京音楽大学付属図書館内
<http://www.iaml.jp>